

《 加藤 秀樹 様 講演 》

本日は、日本食海外普及功労者として選ばれまして、小泉元首相、茂木会長、またジュディ・オング様よりご祝辞をいただきまして、また、江藤農林水産大臣政務官より表彰状を賜り、大変感激しております。心より御礼申し上げます。

私は、1987年に慶應義塾大学を卒業しまして、株式会社トーメン、現在の豊田通商ですけれども、商社に入社いたしまして、入社と同時に、米とか、でん粉、そういった食品を扱う部署に配属されまして、以来、今日まで食料にかかわる仕事をさせていただいております。タイには1993年、トーメンの駐在員として赴任しました。その後、思うところがございまして、1999年10月、現在の会社を立ち上げました。独立に当たりましては、シンガポールに本部がございまして、ダイショグループという会社、それから、私のタイの友人達と共に出資をいただきました。今年の10月で、会社を設立して丸10年、タイ在住は丸16年になります。

現在は、タイ国内の百貨店やスーパーマーケット、小売店、ホテルや日本食レストラン、居酒屋など業務用の市場向けに日本食材を卸す仕事をさせていただいております。また、日系、現地系の百貨店の食品売り場において、自身で運営する惣菜や寿司の販売店、それから日本から輸入するフルーツや野菜、菓子などの販売コーナーを持っております。2006年には、バンコク市内に業務用の日本食材スーパー、キャッシュ&キャリアの形ですね、こういう小売も開店いたしました。

私共の展開の中で、タイの方々、あるいはタイ在住の日本人の方に広く喜んでいただいているのが、おそらく日本食フェア、物産展ではないかと思えます。現在は、主に伊勢丹百貨店さん、バンコク区のお店のほうを会場にして、北海道や九州、東北、広島県など年間6本ほどの日本各地の物産展を開催し、広くバンコクの方々に喜んでいただいております。お客様の約9割は現地のタイの方々でございまして。今現在も、バンコクのほうで九州物産展を開催中でございます。

そもそも2002年2月に、一番初め、青森の物産協会さんからご依頼がございまして、第1回の物産展、「青森ジャパンフェア」というものをバンコク市内のスーパーマーケットで立ち上げました。その頃は、今のように日本食は広くタイの方々には普及していなかったんですけれども、在留邦人の方々をメインのターゲットにして小さくやっておりました。

一方、その頃は、タイ政府が輸入食品に対して独自の衛生基準をもって当局の事前承認を求めるような輸入制度を設けておりまして、日本からの食品の輸入が難しい状況でした。また、日本の輸出業者側の方々も、海外、特に東南アジアへの輸出には積極的に力を注いでいただけるような雰囲気ではなく、正直苦勞の連続でした。そういう中、今

年の2月まで、8年連続でタイでの物産展にご協力いただきました青森県さんには大変感謝しております。

その後、日本食がタイ人の間で徐々に受け入れられるようになりまして、また、タイ自体が経済発展と共に食品の輸入をオープン化したものですから、日本食の輸入も格段に容易になりました。また、農林水産省が輸出促進に予算を設けて、2004年から3回、ジャパンフードフェアという日本単独の展示商談会をタイで開催いただきました。それから、常設展示事業などテスト販売の機会を作っていただきまして、日本の農産物・水産物の認知度やタイの富裕層に食べていただける機会が格段に増大しました。

今では、タイにはおよそ900店舗と言われますが、日本食のレストランがごございます。その数は増えております。ジェットロの調査では、その市場規模は年約200億円だそうです。また、バンコク市内の百貨店やスーパーマーケットにも日本食のコーナーのないお店がないほど市場が広がりました。直近のニールセンの調査によりますと、タイ人が外食をする際にどのような料理を選ぶかという質問に対して、タイ料理と答えた方が57%と一番なんです。その次に26%の方が日本食と答えたそうです。大変嬉しい限りです。

このように、今では、タイは世界有数の日本食が受け入れられる市場となりましたが、この流れをさらに浸透させていくには、我々食品業界に従事するものだけで動いていても限界があるのではないかという面もごございます。今後は、医療やファッション、芸能や文化、こういったものを広める事業に従事しておられる方々との連携、そして観光誘致、ピジットジャパンの分野との連携も積極的に進め、広くオールジャパンで日本のファンを増やすことに力を注ぎたく考えております。この点、政府そして地方公共団体等各方面の方々にもよろしくご支援のほどをお願いいたします。

最後になりますが、今年2月、福岡県の糸島という農協さんにお邪魔した際に、その組合長さんから非常に嬉しいお言葉をいただきました。私共はここ3～4年、あまおうという福岡県特産のイチゴのタイでの販売に力を注いでいるんですけども、この組合長さんいわく、自分達が生産する作物が海外に輸出されるということで、目を輝かせて農業に入ってくる若者が増えているとおっしゃるんです。もちろん、私共が販売させていただいている数量は国内で販売されている量に比べればまだまだ小さいですけども、そのことがモチベーションになって農業の若い担い手が増えるということは、我々、海外で日本の農産物、水産物の販売に従事する者として大変嬉しいことです。これからも、こういう方々が少しでも増えていくように、一生をかけて頑張っただけでまいります。本当に今日はどうもありがとうございました。